

アメリカにおける40年間の言語学習法 及び理論・歴史（1950～1990）的考察

ロバート・ジョーン・アラニヤ

序 文

言語学の新しい概論や方法を紹介するためには、まず歴史的に考察することが必要である。この論文はアメリカにおける40年間の言語学習法及び理論を歴史的に考察したものである。

アメリカでは、1950年から1960年まで国語以外の言語を学ぼうとすることが「外国語学」(FOREIGN LANGUAGE STUDIES)と呼ばれていた。又、当時、外国語は「勉強するもの、あるいは教えられるもの」(STUDIED OR TAUGHT)と見なされていた。1970年代になると、「外国語」という言葉が外されて、「第2言語学習」(SECOND LANGUAGE LEARNING)という表現に言い換えられたがそれはまだ過渡的な段階であった。これが定着したのは1980年代になってからであった。そして1990年代には、「言語を学ぶ」(LEARNING A LANGUAGE)が「言語を習得する」(LANGUAGE ACQUISITION)に呼び換えられ、また言葉を学ぶ過程では、教室の中だけでなく、外における(外部)環境も充実していくものと予想される。

過去40年間におけるアメリカの語学学習法及び理論を要約すると次のようになる。

1. 外国語学の時代 (FOREIGN LANGUAGE STUDIES ERA)

外国語学は人間の歴史の初めからあると言われていたが、これだけ世界中に多く普及し、情報化、システム化されてきたのはこの40年間においてである。それは40年間特に戦後においては、国際的な貿易の発展にともない人的交流が盛んとなって、外国語を普及ならしめてきたからである。この間に、全体の語学活動に関しての研究や開発基礎となっている。代表的なものは、「文法訳読学習法」(GRAMMAR TRANSLATION METHOD)と「直接教授法」(DIRECT METHOD)である。この二つの学習法の説明から本文を進めていく。

1-1 文法訳読学習法 (GRAMMAR TRANSLATION METHOD)

世界や日本で最も普及している「文法訳読学習法」(GRAMMAR TRANSLATION METHOD)は、アメリカでも1970年代まで最も流行ったものであった。文法訳読学習法では、言葉のきまり(文法)の暗記と文の読解を目指すものであり、言語をしゃべるよりも、知識を身に付けることを目標にする学習法である。それは時として学校の入学試験の合格を目標とするためのものであると書いていいであろう。試験は、教科書と関連した問題で、それによって勉強の成果が計られる。

文法訳読学習法の特徴は六つである。

- 1) 40-50人の人数をいっぺんに指導することができる。
- 2) 教授している言語を母国語とする教師でなくても充分指導することができる。
- 3) この学習法のための教材の種類が豊富で質も高い。
- 4) 高校や大学の入学試験の合格を達成するための最も効率的な学習法である。
- 5) 経営的側面から見た場合、多人数クラスに適した教え方なので、経営的負担が少ない。

6) 文法訳読学習法では、教室環境は「教師主体」(TEACHER-CENTERED) であって、教師が生徒を引っ張っていく。

すなわち、教師は幅広い指導テクニックを駆使し、生徒の注意を引くことで、新しい言葉を生徒に覚えさせようとする。現在この学習法は、アジア、ヨーロッパ、アメリカでも、よく使われている。

1-2 直接教授法 (DIRECT METHOD)

「直接教授法」(DIRECT METHOD) は M. BERLITZ によって開発された。アメリカでは、この学習法は第二次世界大戦後の観光ブームに乗って、人気を呼んだ。アメリカでの直接教授法は「ベルリッツ語学教室」(BERLITZ LANGUAGE SCHOOL) というかたちでビジネスとして成功し、世界中に広がっていった。

直接教授法は文法訳読学習法と違って、言葉の規則の暗記と文の読解を目指すものではなく、「目標とする言語」(TARGET LANGUAGE) を教室で直接聞いたり使ったりするものである。この教授法によって、「言語習得過程」(LANGUAGE ACQUISITION PROCESS) を短縮する効果が得られる。直接教授法は「会話法」(CONVERSATION APPROACH) とも呼ばれている。

この学習法の原点は生の声で特定の言葉や文を耳で聞き、声を出して、真似する過程を通して、言語の規則や文法の要点が紹介され、同時に身に付けられるというものである。

「BERLITZ METHOD」のインスピレーションを受けて、イギリスの二人の学者 OTTO JESPERSEN (JESPERSEN, 1904) と HAROLD H. PALMER (PALMER, 1921) は直接教授法を改善して、「口頭導入教授法」(ORAL APPROACH) という新しい言語学習法を開発した。この科学的、画期的な学習法は「聞きとり」と「会話」という学習過程をより細かく段階的に、かつシステム化したものであった。そして、数十年がたったにもかかわらず、この学習法はアメリカで50年代から70年代にわたり大きな影響を与えた。現在日本の「英会話教室」でも「口頭導入教授法」(ORAL APPROACH) が大

勢の外国人教師によって使われている。

口頭導入教授法の特徴は五つである。

- 1) 教授人数は5-10人の小人数クラスである。
- 2) 教授している言語を母国語並に流暢に話せる人が教える（外国人教師が多い。）
- 3) この教授法は教師自身の労働負担が大きい。
- 4) 経営的側面から見た場合、小人数クラスに適した学習法。
- 5) 教室環境は、教師が主体であって、生徒を引っ張っていく。

すなわち、教師は幅広い指導テクニックを駆使し、生徒を動かしたり注意を引くことによって、新しい言葉を生徒に覚えさせようとする。教師が徹頭徹尾中心になる。

2. ハイテク言語学習時代 (AUDIOLINGUAL ERA)

一方、1950年代と1960年代は、科学的な言語学習法が多く採られ、この20年間は「科学的接近法」(SCIENTIFIC APPROACHES)の時代とも呼ばれた。1960年代と1970年代になると、アメリカにおける言語学は再び違う方向に向った。70年代の研究テーマは「学際的統合」(INTERDISCIPLINARY OVERLAPPING)であり、これは色々なアディアが導入される方向を示したものであった。この「柔らかい、人間の感情を重視する教育環境」(SOFT VIEW EDUCATION)は、「現代心理学」(MODERN PSYCHOLOGY)、「発達心理学」(DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY, SKINNER, 1957)「言語心理学」(PSYCHO-LINGUISTICS)、「構造言語学」(STRUCTURAL LINGUISTICS)、「行動科学」(BEHAVIORAL SCIENCE)、「生理学」(PHYSIOLOGY)等の学問を取り入れたものであり、70年代に言語学習法は続々と開発された。そして、「人間的アプローチ」(HUMANISTIC APPROACH, MATSON, 1971)が支配的となった。また1960年代と1970年代は、言語を機器で教える「ハイテク言語学習時代」(AUDIOLINGUAL ERA)でもあった。「生徒主体」の概念

によって、より充実した教室学習を目指すためにハイテクな学習機器が開発、導入されたことによって、学習環境と学習法が大きく変わった。

新たな学習過程と学習心理の理論が続々と研究され、激しい議論が交された。1960年代と1970年代の研究論争は人間の言語を学ぶ内部及び外部環境の理論の二つのテーマに分れて展開し、そのために様々な議論が行われた。

人間の「言語を学ぶ内部環境理論」の代表的なものは「頭脳言語習得装置」(LAD HYPOTHESIS, CHOMSKY, 1959)であり、人間の「言語を学ぶ外部環境を重視する理論」の一つで話題を呼んだものは「監視理論」(MONITOR THEORY, KRASHEN, 1978, 1981)であった。

研究論争時代のもう二つの焦点となったのは「言語習得理論」(LANGUAGE ACQUISITION APPROACH)と「教室における教育環境」(CLASSROOM LEARNING ENVIRONMENT)言語を学ぶ外部環境であった。

教室における教育環境は、二つに分れた。一つは「教師主体の教室」(TEACHER-CENTERED CLASSROOM)であって、もう一つは「生徒主体の教室」(STUDENT-CENTERED CLASSROOM)であった。70年代の「言語の教室」(LANGUAGE CLASSROOM)は、「教師主体の教室／言語を学ぶ教室環境」から、「生徒主体／言語を習得する教室環境」へと移行した。この言語学習方針の変化を生じたのは、発達心理学の「刺激／反応と積極的な補強」発達論 (STIMULUS/RESPONSE POSITIVE REINFORCEMENT, SKINNER, 1957)であった。

また、よりよい教室環境を提供すれば生徒は新しい言語をより早く身に付けることができると期待された中で、言語学は次々と新しい分野に分れた。「言語を学ぶ」概念は「言語を習得する」(ACQUIRE A LANGUAGE, TAYLOR, 1974)概念におきかえられた。さらに、「構造言語学」(STRUCTURAL LINGUISTICS)、という新しい言語学問によって、言語の構造が注目されるようになった。そして言語の構造、組織は「音韻論」(PHONOLOGY)、「語形態論」(MORPHOLOGY)、「文法」(SYNTAX, GIVEN, 1984a)と各々の分野に分かれていった。

1960年代と1970年代の言語研究の発展に大きなインパクトを与えたのは理論よりも「ハイテク機器の躍進的な開発」(TECHNOLOGICAL BREAK-THROUGH)であった。なんとといっても「言語を機器で教える」が言語学習法や理論的な発展に大きな影響を与えた。「LL 教室」(LANGUAGE LABORATORY)によって、生徒の声を何回も録音できると同時に聞くこともできる機器と「カセットテープ」の利用は教師の負担を軽減した。

このことが今までの教師の声と耳がなければ「ヒアリング」と「スピーキング」を練習できない「教師主体の教室」を生徒が自分で機器を使って学習する「生徒主体の教室」へと移行させることになった。発音の聞き繰り返しは機器でできるようになり、教師は、機器を通して、生徒自身に言語を勉強させることが可能となった。この新しい機器の開発と教室への導入によって、環境の充実と生徒主体の教室学習法は一層発展することになった。

ハイテク教室による貢献は次の四つであった。

- 1) 発音を繰り返し聞くことは教師がいなくても、機器でできる。
- 2) 機器を使っての生徒主体の教室学習法によって、少ない学習時間を有効に使える。
- 3) ハイテク教室によって、一年間のカリキュラムを増やすことが可能。
- 4) 教師は余分の時間を利用して新しい事を考えることができる。

2-1 ハイテク学習法 (AUDIOLINGUAL METHODS)

アメリカでは、1970年代は「人間を重視する考え方」(HUMANIST APPROACH)と数多くの「ハイテク学習法」(AUDIOLINGUAL METHODS)が支配であった。教師はハイテク学習法教材と「学習機器」として「教室を活かす (WORK THE CLASSROOM) 教室環境理論」を提供し始めた。これと同時に学習を身に付ける責任は教師から生徒へ移転することになった。そしてLL 教室は教師の代わりに生徒に言葉を話させる訓練の場としての役割をになうようになり、教師もまた、LL 教室を通して、生徒により豊富で幅広いカリキュラムを勉強させることができるようになった。

ハイテク学習法の特色は、

- 1) 無意識で、機械的な多くの練習回数
- 2) 段階的な文法訓練
- 3) 対話形式の暗記
- 4) その場での間違いの訂正
- 5) 比較分析による誤りの予測
- 6) 段階的用語の使い方
- 7) 一つの学習を終えた上で新しい事柄を教えることである。

ALMによって、アメリカにおける語学教室は、多目的で内容豊かな環境となった。一年間に、40-50人のクラスのカリキュラムに文法訳読学習法をとり入れ、授業は直接教授法を用いLL機器を通して対話を訓練させることが可能になった。そして1970年代の後半までに、生徒と教師は「総合的な」(INTEGRATED), 「多目的」(GENERALISTIC) 教室を築くことになった。

2-2 特定の学習法 (SPECIALIST METHODS)

1980年代に入ると、多目的で内容豊かな教室環境は整合性を欠くようになった。すなわち「集成的な」、「統合的な」教室環境は内容や目的が多すぎて、中途半端な結果をもたらすことになった。また他方において、既に1970年代後半には言語学習の分割化も始まり、1980年代に入ると統合的な教室は、「特定の学習法」の教室に移転する傾向を示しはじめた。そして「集成化」教育過程へと移行し、80年代の語学教室の教育テーマは「特定の目的のための教室」(CLASSROOM FOR SPECIFIC PURPOSES) となっていった。「目的別学習法」(SPECIALIST APPROACHES) は学ぶ目的と内容を特定することである。特定目的の分割によって、次々と新しい学習法が誕生した。すなわち「基本単位学習法」(MODULAR APPROACH, 1967, L. EARL STEVIC) は、生徒の外部環境を重視して、言語使用の場面をテーマ単位に分割し、文法と単語を段階的に紹介する。例えば、買物をすることを学習目的にして、買物をする時に使う単語、文などのショッピング場面を教科書で紹介する。「連

想教授法」(SUGGESTOPEDIA, 1971, GEORGI LOZANOV) は、外部環境を重視しながら生徒の心に新しいことを学ぶ恐怖感をなくして、積極的かつ前向きの授業態度を持たせ、生徒の新しいことを学ぶ緊張感をできるだけ取り除き、間接的に潜在意識を通して言語を身に付けようとする。

「積極的学習法」(SILENT WAY CALEB CATENGO, 1976) は、生徒に「学ぶ」、「習う」という責任をもたせるものである。これは生徒の内外環境を重視して、言葉をすぐ使いこなしていくより、しばらくの間は言葉や文を聞かせ、多様な言語による刺激や情報を受けさせることが先であるとするものである。発音、リズム、イントネーション、のパターンに慣れることは、言葉を積極的に取り入れて、結果として学ぶ過程を短縮することになる。「セント・クラウド学習法」(SAINT CLOUD METHOD, L. EARL STEVIC, 1967) は「耳で聞く刺激」と「目で見える刺激」を言語習得の引き金とし適当な刺激の上で自然に言葉を身に付けるという考え方をもとにしたものである。「カンセリング学習法」(COUNSELING LEARNING METHOD) は、生徒を主体とし、教師は生徒一人一人の事情、要求、経験を考慮した上で指導内容を決めていく方法であり、教師は生徒の「学習する資源」であって、言葉を習得する過程において生徒の対等のパートナーでもある。

「全身反応学習法」(TPR-TOTAL PHYSICAL RESPONSE, JAMES ASHER, 1977) とは言葉を身体で覚えるものである。教室は生徒主体であって、学ぶ本人の身体で反応した体験の上で、言葉を早く覚えさせていくものであって、外の環境の多様な刺激によって、言語習得をより早く行わせることを可能にする。「TPR 学習法」では、教師が教室で生徒一人一人に適当な体験をさせることによって、言葉を身に付けさせる。生徒は言葉を話すより言われた言葉に対して適切に行動すれば良い。例えば、「たって!」と言われたら、立てばよい。身体を動かすほど言葉が身に付くという理論である。

「近況理論」は現実的言語を学習するものである。事情や現場を再現する本格的な内容で教材を作ることによって教師は現実的な面白い教育環境を提供することができるというものである。こういった学習法は「状況学習法」

(SITUATIONAL APPROACH, EUGENE HALL, 1978) と呼ばれた。

そして、1970年代、80年代には数々の学習理論や方法の開発が進められていくと同時に語学教師を養成する資格や組織も誕生した。代表的な組織と資格の一つは「他言語」(TESOL-TEACHING OF ENGLISH TO SPEAKERS OF OTHER LANGUAGES)である。日本では1978に「全日本語学教育学会」(JALT-JAPAN ASSOCIATION OF LANGUAGE TEACHERS)が設立された。70年代、80年代には「外国語として英語を教える資格」(TEFL-TEACHING ENGLISH AS A FOREIGN LANGUAGE), 「学究的な英語教育」(EAP-ENGLISH FOR ACADEMIC PUROSES), 「特定の目的の英語教育」(ESP-ENGLISH FOR SPECIAL PUROSES), 「科学と工業技術の英語教育」(EST-ENGLISH FOR SCIENCE AND TECHNOLOGY), 「第2言語のための職業英語教育」(VOCATIONAL ENGLISH AS A SECOND LANGUAGE)等の指導者を養成する資格や組織が設立された。

2-3 コミュニケーション学習の概念 (COMMUNICATION CONCEPT)

「コミュニケーション」アプローチ (COMMUNICATIVE APPROACHES) は1980年以降使われるようになってきた。コミュニケーションアプローチは言語の定義を見直すことになった。

すなわち、言語とは、「言葉を使う」と言うよりも「コミュニケーション」や「コミュニケーション能力」(COMMUNICATIVE COMPETENCE, CANALE AND SWAIN, 1980)である。

「コミュニケーションアプローチにおいては、コミュニケーション能力を以下の項目に分割している。

1) 言葉の正確性

「LINGUISTIC COMPETENCE」
(LANGUAGE USAGE)

2) 会話の正確性

「SOCIOLINGUISTIC COMPETENCE」

(LANGUAGE USE)

3) 会話の系統性 (つじつま)

「DISCOURSE COMPETENCE」

(COHERENCE COHESION)

4) 会話の適用性

「STRATEGIC COMPETENCE」

(COMMUNICATION REPAIR STRATEGIES)

そして、コミュニケーションというものははっきりしないために、ガイルズ (GILES) は1980年に、もっとはっきりした「言語を話す動作」(SPEECH ACT) の定義が必要ではないかと述べた。「言語はコミュニケーション」(COMMUNICATIVE APPROACH) という概念は「ハイテク学習法」(ALM) から導きだされた概念であり、言語教室に、より会話的な活動 (小グループの対一活動, 演説訓練, ロールプレー, 問題解決練習) を導入した。コミュニケーション概念によって、「言語を使う能力」と「言葉の正確性」がもたらされることになった。

科学的な1950年代, 研究熱心な1960年代, 社交的な1970年代, コミュニケーションの1980年代を通して積み重ねられた努力は語学教育と語学教育産業を大きく発展させた。世界中における外国語ブームによって、外国語を学ぶ生徒の人口は年々増加した。又、世界の貿易増加によって、相手国の言葉を覚える必要が益々重要になってきた。40年間に世界各国は国際化が進む中で、語学学習の意義は学問的なものから社交的なものに転化していった。こういった時代の変化によって、アメリカでの言語学は「外国語」から社交的な語学「第2語学を学ぶ」に言い換えられるようになった。「学ぶための語学」は「習得するための語学」になった。1980年代のアメリカでの語学教育の最も大きな目的は「コミュニケーション能力」であった。コミュニケーション能力を発展させるための語学の教室環境は「固い, 科学的な」(HARD, SCIENTIFIC) 学習法から「自然な, 実用的, 機能的」(NATURAL, PRAGMATIC, FUNCTIONAL) な学習法へと変っていった。

2-4 新自然学習法（“NEW” NATURAL METHODS）

1980年代のアメリカでの語学教育テーマは「コミュニケーション能力」であった。またコミュニケーション能力を重視した「ハイテク機器」（ALM）の教室から、もう一つの観点が導き出された。それは言語が、柔らかく、働きがあり、更に未完成で、生徒主体のものであるという考えである。それまでの教育環境は言葉を学ぶ上でのきまり、そして特定の目的を持っていた。しかし、「新自然学習法」（“NEW” NATURAL METHODS）の語学への大きな貢献とは「言語の無意識習得概念」（UNCONSCIOUS LEARN OF LANGUAGE CONCEPT）であり、「無意識に起こる現象」を重視したことである。子供の言語習得過程を観察することによって、子供は言葉を「勉強する」というよりむしろ、「勉強」しないで身に付けれるということが明らかとなった。言語は珍しい、特別のものではなく、自然の一部にすぎず、従って自然のままに習得させるべきものである。そして、言語は何よりも聞くことから始まる。言語習得には自然の順序があり、そのためにより本格的、多樣的、機械的な教授活動が必要となる。

「自然学習法」は言語学に四つの理論を導入した。

- 1) 言語習得理論
(ACQUISITION THEORY)
- 2) 言語監視理論
(MONITOR THEORY)
- 3) 反応ろ過機能理論
(AFFECTIVE FILTER THEORY)
- 4) のみこみやすい情報理論
(COMPREHENSIBLE INPUT THEORY)

3. 折衷主義の時代（ECLECTIC ERA）

過去40年間、アメリカでの学習法及び理論は様々であった。数多くの議論

が交わされたことによって、言語は考えられていた以上に複雑で、幅広いものであると見直された。また1980年代の後半以降には、言語の教え方、学び方はあまりにも多くなりすぎているが、それはまた新たな発展につながっていくであろう。今後、1990年代では、こうした現状を踏まえ、「各人のやり方」(MY WAY)が導き出されるだろうと思われる。1990年代の教授者と生徒にとってのテーマは「折衷主義の時代」あるいは取捨選択であると言ってもよい。これによって、各人は、自分なりの感覚、目標で、語学を進めていく。今後は生徒の学習目的によって、自由に学習法を取り入れる時代になる。

4. ま と め

1990年代に向かって、教室における語学について議論しなければならないことが数多く残っているが、1990年代は「新しい現実の時代」であると考えている。ドラッカー博士 (NEW REALITIES, DRUCKER, 1989) の考えによる次のような世界的な変化は世界各国や社会における言語学、学習法にも大きく影響するであろう。

- 1) 知識化社会
(KNOWLEDGE SOCIETY)
- 2) 情報化社会
(INFORMATION SOCIETY)
- 3) グローバル化社会
(GLOBAL SOCIETY)
- 4) グローバル化経済
(GLOBAL ECONOMY)
- 5) グローバル環境危機
(GLOBAL ECOLOGICAL CRISIS)

こうした五つの世界的な変化は、我々の言語やコミュニケーションそのものに対しての見方を変えてしまうであろう。

情報化された社会では、コミュニケーションは「双方向の伝達関係」（TWO-WAY）をいい、それが効果をもつには「言語」（LANGUAGE）よりもむしろ「伝達内容」（MESSAGE）が重要となる。

「ここにいる私がパリ、ロンドン、ニューヨーク、東京にいる知人からなんらかのメッセージをもらった場合、そのメッセージの内容を理解することができる。なぜかという、知人の考え方、必要としていることを解っているからである。」

「言語」だけではコミュニケーションは不完全であり、「伝達内容」を伴ってこそコミュニケーションは完成される。また「知る必要性」が「共有」（COMMUNION）意識を高め、よりよい教育環境を創り、世の中に貢献するためには「言語を学ぶ者」と「教授する者」はお互いに相手を理解しようと努めなければならない。

おわりに

急速に統合されていく世界において日本人が外国語を学ぶということは「新しい現実の時代」と重要な関連を持つのである。日本の語学に対しての根本的な考え方を検討した結果、次のような提言を行いたい。

- 1) 異文化の言葉は「外国語」として学ぶより「第2言語」として学ぶ
- 2) 語学は文法から始めるより先に体で覚えること
- 3) 語学は高校受験科目から省くこと
- 4) 日本人の教師あるいは外国人の教師は教授する言葉が流暢であること
- 5) カリキュラムの内容を身近にすること
- 6) 教育過程と教育者の国際化を深めること

戦後45年目を迎えて、英語は日本でこれだけ外国語学として注目を集めている。他国から英語を教えに来る教師達が日本の社会様相や習慣を勉強した上で来日してくる時代になった。日本人に英語を教える他国からの教師は自分らしさを守りながら日本人生徒のニーズに応じていかなければならない。

いくら海外で成功している教授法や教材であっても、日本の語学教室に適した、よりユニークな開発が必要でないかと考える。そして、過去の歴史を踏まえた上で90年代に向けての新しい学習法を開発するよう努めることが肝要であろう。この点に関しては次の論文で考察したいと考える。

あとがき

この論文を執筆するにあたり中京短期大の専任講師森永弘司、同下村典子氏、中京大学教授日比野省三氏、市邨短期大学教授水野 晃氏、愛知学泉大学の専任講師ハロルド・スロビック氏の多大なご協力に感謝申し上げる次第です。

REFERENCES

- Alatis, J. E. & Altman, H. B. & Alatis, P. M. (1981) "The second language Classroom: Directions for the 1980's". N. Y. : Oxford University Press.
- Anderson, R. W. (1981) "New dimensions in second language acquisition research". University of Southern California, MA: Newbury House.
- Asher, J. E. (1977) "Learning of another language through action". Los Gatos, CA: Sky Oak Productions.
- Canale, M. & Swain, M. (1980). Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing. "Applied Linguistics", 1, 1-47.
- Curran, C. A. (1976). "Counseling-learning in second languages". Apple River, IL: Apple River Press.
- Drucker, P. F. (1989). "The new realities". Great Britain, Heinemann.
- Gattegno, C. (1976). "The common sense of teaching foreign languages". New York: Educational Solutions.
- Giles, H. (1980). Accomodation theory: Som new directions. In S. de Silva (Ed.), "Aspects of linguistic behavior". York, England: York University Press.
- Hall, E. T. (1957). "The silent language. Garden City, NY: Doubleday.
- Haskell, J. F. (1978a). An eclectic method ? In J. Haskell (Ed.), 1986, "Selected articles from the TESOL newsletter: 1966-1983 (pp. 117-119) Washington, DC: TESOL.
- Krashen, S. & Terrell, T. (1983). "The natural approach: Language acquisition in the classroom". Hayward, CA: Alemany Press (Pergamon).
- Klein, W. (1986). "Second language acquisition". N. Y.: Cambridge University Press.
- Lado, R. (1964). "Language teaching: a scientific approach". New York: McGraw-

Hill.

The Language Teacher, JALT Cantral Office, Lions Mansion Kawaramachi # 111,
Kawaramachi Matsubara-agaru, Shimogyo-Ku, Kyoto 600.

Lozanov, G. (1978). "Suggestology and outlines of suggestopedy". New York: Gordon
and Breach. (Original work published 1971).

Murcia, M. C. (1985). "Beyond Basics—Issues and research in TESOL". MA: New-
bury House.

Savignon, S. J. (1983). "Communicative competence: Theory and classroom practice".
MA: Addison—Wesley.

Stevic, E. (1980). "Teaching languages: A way and ways. Rowley, MA: Newbury
House.

Stevic, E. (1981). Learning a foreign language the natural way. In M. Hines & W.
Rutherford (Eds.), On TESOL 81 (pp. 1—10). Washington D. C.: TESOL,
1982.

van Lier, L. (1988). "The classroom and the language learner: Ethnography and
second—language classroom research". N. Y.: Longman.